

カキにおける散布量の違いと夏季せん定が薬液付着率に及ぼす影響

～散布量の増加と夏季せん定の実施により、カキに対する薬液付着率が向上する～

鈴木寛之（新城設楽農林水産事務所農業改良普及課）

【平成23年6月15日掲載】

【要約】

カキの難防除害虫であるフジコナカイガラムシの防除効果を上げるためには、農薬をムラ無く散布することが重要である。そこで、散布ムラについて、散布量の違いと夏季せん定の有無が薬液付着率に及ぼす影響を感水紙を用いて調査した。その結果、10a当たり散布量350Lでは、250Lと比較して薬液付着率が大きく向上した。また、夏季せん定の実施により、両散布量とも薬液付着率が向上した。

1 はじめに

カキの難防除害虫であるフジコナカイガラムシは、主にへタの隙間のような薬液のかかりにくい場所に生息する。そのため、防除効果を上げるためには、薬液をムラ無く散布することが重要である。しかし、十分な薬液付着を得るための薬液散布量や樹体管理方法は明らかになっていない。そこで、感水紙を用い、散布量の違いと夏季せん定の有無が薬液付着率に及ぼす影響を明らかにする。

2 展示概要、調査方法

(1) 供試樹 31年生「次郎」3樹（樹高約2mの低樹高仕立て）

(2) 調査日 平成22年8月18日 当日はほぼ無風状態

(3) 調査方法

①樹冠中央部に支柱を立て、感水紙を3段階の高さ（地上高：高（約200cm）、中（約130cm）、低（約50cm））で上向きに設置した。

②夏季せん定実施前及び実施後、S.S.（スピードスプレーヤー）の散布圧力を変えて2段階の散布量（350L/10a（散布圧力12kg/cm²）、250L/10a（同9kg/cm²））で水を1回ずつ散布した。

感水紙の変色した面積割合を付着率とした。

③夏季せん定では樹冠中心部に発生する徒長枝を中心に剪除した（写真1、2）。



写真1 夏期せん定前

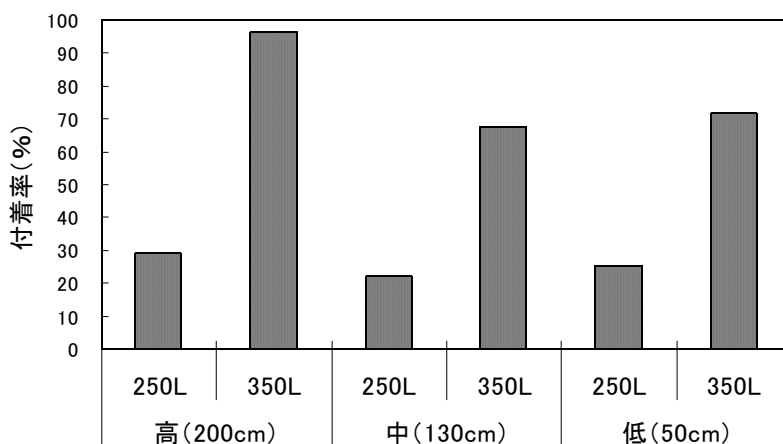
剪除部位



写真2 夏期せん定後

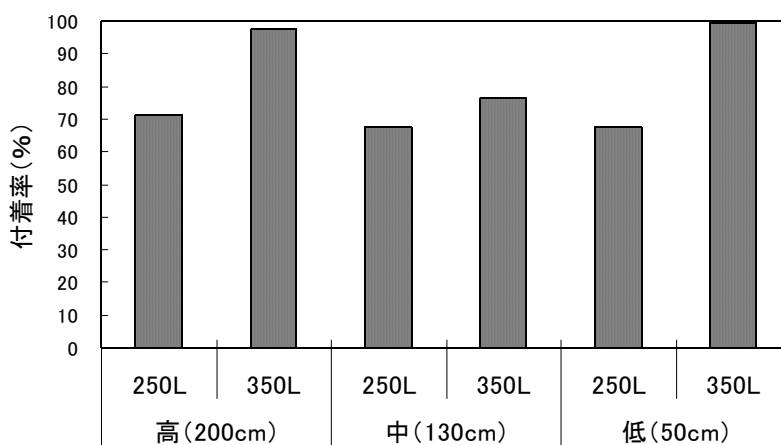
3 結果

(1) 夏季せん定前の場合、10a当たり散布量250Lの付着率は、いずれの高さにおいても、約30%と低い値であった。また散布量350Lの付着率は、いずれの高さもほぼ70%以上となり、散布量増加による付着率の向上が認められた（第1図）。



第1図 夏季せん定前の付着率

(2) 夏季せん定後の場合、10a当たり散布量250Lの付着率は、いずれの高さでも約70%前後となり、夏季せん定による付着率の向上が認められた。さらに、散布量350Lでは、高さ中を除いて100%に近い値となり、付着率がより高まることが認められた（第2図）。



第2図 夏季せん定後の付着率

4 まとめ

S.S.を用いてカキに薬液を散布する場合、散布量を増加することによって薬液付着率が向上することが明らかとなった。本試験において、10a当たり散布量250Lと350Lの間には付着率に大きな差が認められた。一方、昨年の試験結果では350Lと450Lとの間に大きな差は認められなかった。以上のことより、カキに対する効率的な散布量としては350Lが適当であると考えられる。また、夏季せん定によって徒長枝を中心に切除することにより、同じ散布量でも付着率が向上することが認められた。このことにより、散布量を確保すると同時に、夏季せん定等により薬液がかかりやすい環境を整える事が重要である。